

今ではほとんどいなくなってしまった「博覧強記の好学者」が、戦後直後までは在野にそれなりに存在していた。尾佐竹猛、三田村鳶魚、竹越与三郎、徳富蘇峰といった人々だ。かれらは徳川時代史・明治維新史のまさにこんなことまで知っているのかという微細な史実に通じ、それらをふんだんに盛り込んでの自在な史論で、それこそ驚くべき多数の著作を世に送り出してきた。福本和夫は、むしろこうした好学者群像に連なる者として名をとどめるのではないかと、いうことを鮮明に示しているのが『日本ルネサンス史論』だ。むしろといったのは、福本和夫といえ、無論草創期共産党のイデオログ、悪名高い「分離＝結合」論というセクト主義的組織論を唱えた理論家としてあまりに有名で、彗星の如く登場した後は、長期にわたる獄中生活を強いられ、いつしか忘れ去られるに至った人物だからだ。『福本和夫著作集』全十巻の刊行は、こうした福本和夫、福本イズムの長い間の偏見にも近い神話を打破し、そのマルクス主義に関してもフランクフルト学派やルカーチらとの関連から再検討する機運をつくり出す画期的事業となることが期待されているが、それ以上にまさに「生きるエンサイクロペディア」とでもいうべき豊かな教養文化人が、同時にもっとも過酷な弾圧に直面していた時期の共産党の理論家でもあったという驚くべき事実、「硬直」したスターリン主義の非人間的性格でしかイメージされない日本マルクス主義像に修正を迫る爽快な事実がわれわれを誘うことになるだろう。

全五十章にも及ぶ膨大な『日本ルネサンス史論』の細部まで紹介することはできないが、そこには古学派を中心とした儒学者、歌道復古を唱えた国学者、古医方系医者、兵学者、法学者、さらには博物学者、測量家、画家、小説家、俳諧師、書家、鉱山家などが網羅的に取り上げられており、それ自身一個の江戸時代人物群像のパノラマの観を呈している。この膨大な人物群像をもって福本がいたいことは、きわめて明確な一事である。明治維新がどのようにしておこったのか、どのような性格の革命であったのかをしるためには、寛文初年（一六六一）から嘉永三年（一八五〇）に至る時期に、徳川日本にもルネサンス的思想革命・文芸革命が存在していたことを、（マニファクチュアの存在と並んで）知ることが重要だというのである。そして、そのルネサンスの時代性・階級性・革新性を西欧と比較することで、「現在の資本主義社会を変革し、労働者・農民の解放をはかるための運動方針」が理解されるというのだ。どうやら、この研究は、福本においては、講座派・労農派を両ながら批判する「繞廻包圍作戦」としての意味もあつたらしい。だが、主張の単純さはおくとしても、これだけ多数の人物群像を西洋ルネサンス期からマルクスに至る西洋文芸・思想史と比較し、さらには明・清中国、朝鮮王朝のそれとも比較しようとするのだから、その史論を構築するために必要となる知識が、どれだけ途方もないものになるのか、絶句せざるをえない。「日本ルネサンスの最も大立者の一人」とされるだけあって、隨所に登場している荻生徂徠に関していえば、やや専門的にすぎる『論語徴』や経書研究などはさすがにあまり言及されていないが、『政談』『太平策』は無論のこと、『徂徠先生答問書』『由園雑話』は何度も何度も引用されており、まさに精読・熟読の末に本書が執筆されたことが窺える。そして、重要なことは、その徂徠学が決して徂徠単独のものとは捉えられておらず、「当世世態人情の現実的・歴史的な観察と分析」として位置づけられていることだ。徂徠学が国学や医学などに与えた影響も的確に捉えられており、アカデミズムとは異なった位相にいた者が、丸山真男以降の戦後思想史学が格闘してきたテーマを、戦前期から直覚的に把握していた事実には嘆息せざるをえない。

福本が『日本ルネサンス史論』の着想を最初に得たのは、一九二二年の文部省在外研究員時代であり、それを十四年間に及ぶ獄中生活で練り上げ、その後推敲を重ねて第四次草稿の完成を見たのが一九六四年という。文字通りライフワークというべき著作であったといえよう。福本イズムやその他膨大な福本の著作は、この『日本ルネサンス史論』と共にあったといってもよいことになる。福本自身は、徳川時代にルネサンスを認めたものは自分が最初であると自負しているが、翻訳型の近代学術の日本像には当初よりルネサンスとの比較が、中国蔑視観と並んで色濃く刻印されざるをえなかった。この意味ではアカデミズムではむしろ一般的言説であったといってもよい。だがそんなことを福本に突きつけることはあまり意味がない。むしろ、このライフワークが示しているのは、日本マルクス主義の理論的格闘には、かくなる壮大な営為も含まれていたこと、そしてそれを成した、とてつもない教養を有したマルクス主義者がいたという何かしら爽やかな事実であろう。